

共同研究【若手】 ● 人の移動から見る場所・空間・景観の人類学的研究 (2008-2010)

人の移動とフィールドワーク

グローバリゼーションやトランスナショナルリズムを視野に入れた文化人類学的研究のテーマの一つとして、人の国際移動がある。出身地や出身国を超えて移動し、国境を超え異なる地域に移住してコミュニティを形成したり、さらに出身地に戻ったり、さらに別の目的地へと移動するといった人の移動は、現代世界を特徴づける現象である。このような現状が、文化人類学者が調査するフィールドで観察されるようになってから久しい。だがその一方で、特定の場所に住み込み、住民とともに暮らしながら調査を進めるというフィールドワークを主要な研究手法とする文化人類学にとって、移民を対象とする調査・研究には様々な困難が付きまとう。特定の地域とそこに居住する人々が、必ずしも一致しないという状況で、文化人類学者はいかにしてフィールドワークを行い、それらの現象を捉えることができるのかは、困難な問題として存在しているのである。

このような状況の下、移民を対象とする文化人類学的研究では、自己の調査や研究に空間的な広がりはいかにして取り入れるかが重要な問題として浮上してきた。いわば、調査者がフィールドワークで生活し、直接体験できる範囲を超えた空間を視野に入れる研究を行う必要が生じて来たのである。このような背景により、場所、空間、景観、領域、地域性といった地理学的概念が文化人類学にも様々な影響を与えてきている。特に人間や資金、知識、情報、メディア、イデオロギー等の様々な事物が流動する現状を捉えようと試みる研究では、空間に関わる研究が重要性を持つこととなる。

移動と空間に関する共同研究

以上の問題意識に従い、本研究会では共同研究メンバーがこれまで個別に行ってきたフィールドワークに基づく民族誌的成果を相互に参照することにより、上述の問題について場所や空間、景観といった共通の枠組みに依拠して議論し、今後の研究方向について模索することを試みた。

初年度の研究会では、代表者である市川が本共同研究の主旨説明と、パプアニューギニア華人の故郷認識についての研究発表を行った。パプアニューギニアの華人は数世代を経て中国からパプアニューギニア、オーストラリアへと連続的に移住していったが、このような経験により彼・彼女らがパプアニューギニアや中国に対し、異なる故郷認識を持つということを報告した。続く共同研究会では、各共同研究員がそれぞれの民族誌的調査に基づく研究報告を行った。椿原敦子はアメリカ合衆国ロサンゼルスにおけるイラン人移民の文化



中国広東省のパプアニューギニア華人の祖先の出身地。祖先がかつて住んでいた家屋を立て直したり、学校や道路、東屋を建設したりする華人も存在する。

団体を取り上げた。彼女はロサンゼルス郊外のイラン人コミュニティを対象に、そこにおける文化団体の特徴を空間認識に関わるペルシャ語の民俗語彙に注目することにより分析した。木村自はミャンマーと台湾における調査から、両地域の雲南ムスリムの移住やその語りに注目し、彼・彼女らのディアスポラ性を「共存する差異」という観点から分析した。横田祥子は近年の台湾における、ベトナムやインドネシア出身女性と台湾人男性との結婚という、いわゆる国際ブローカー婚について発表した。そこで横田は家族形成

と労働が連続線上にあるという自己の見解を紹介し、現在ではそれがグローバルな広がりを持ちつつあると分析した。渋谷努はフランスにおけるモロッコ移民の帰郷について取り上げた。フランス社会にすでに定住しているモロッコ移民たちが出身地であるモロッコの村落を訪問することにまつわる各種の実践を発表した渋谷は、そうした人々にとって越境が持つ意味を論じた。飯高伸五はパラオ共和国における植民地期以降の村落空間の再構成について発表した。パラオではかつて日本がこの地域を南洋群島として統治していた時期に、島民観光団として当地の首長を日本に送るということが日本によって行われていた。観光団として日本を訪問した人々が帰郷後、その経験を基に村落の空間的構成を変化させた事例に注目し、飯高はこれを「模倣の社会空間」という概念によって跡付けた。

初年度の一連の共同研究会では、それまで別々に移民や村落景観、都市空間等に関する研究を行ってきた者同士が共同研究会に参加したため、はたしてどれだけ共通の問題意識に従って議論出来るか、不安があった。だが予想以上に、異なる地域や民族集団の事例を、共通の問題意識の下で議論することが可能であることが明らかになった。それを踏まえ、初年度までに参加していた共同研究員が対象としていない地域やテーマの研究者による協力が必要である点、また場所や空間、景観といった概念が、人の移動とどのように関わっているのか理論的な議論が必要である点が確認された。

以上の問題意識から、2年目は新たに2名、共同研究員として参加してもらうとともに、特別講師による研究発表を依頼した。まず2年目の第1回目の研究会では人文地理学者の加藤政洋を特別講師として招待し、人文地理学における近年の研究動向と自身の研究から、場所・空間論と人の移動に関する諸問題についての発表をうけた。続く共同研究会では初年度と同様、各共同研究員による民族誌的成果を報告した。久保忠行はタイにおけるミャンマー人の難民キャンプを取り上げた。そこで久保は場所と空間の概念的整理を行い、その上で

難民キャンプに見られる場所概念と空間概念の対立的・相補的・循環的關係といった複数の層や重なり注目する視点を提供した。窪田暁はアメリカ合衆国ペンシルベニア州に居住するドミニカ移民を取り上げ、彼らが移住先で組織するソフトボール・チームの活動に注目することにより、移民が移住先でスポーツを通じて作り上げる故郷という空間について論じた。小谷幸子はアメリカ合衆国サンフランシスコの日本人町と在米コリアンの関わりについて発表した。大西秀行は人の移動が住民の景観認識に与える影響について、北海道上川アイヌと奄美加計呂麻島の事例を紹介しながら分析した。大川真由子はザンジバルから1970年代にオマーンに帰国した人々を取り上げた。オマーンに帰国したアフリカ系オマーン人に対するネイティブ・オマーン人からの偏見を含む対応と、それによって形成されるアフリカ系オマーン人の社会空間が紹介され、帰還移民が作る社会空間についての考察がなされた。奈倉京子は中国に帰国した華僑たちにとっての故郷認識について、福建省廈門市における帰国華僑の組織「帰国華僑の家」を事例として考察した。奈倉は「帰国華僑の家」が、拡散して生活する帰国華僑をまとめ、海外と交流するための結節点としての役割を果たしており、目に見える活動のみならず、かつての居住国や帰国後の中国における目に見えない帰国華僑の経験や記憶も、結節点の力を強めていることを論じた。

以上、簡潔に述べただけでも、本共同研究で取り上げた地域およびテーマは多岐にわたる。人の移動を場所・空間・景観という概念からいかにして文化人類学的に把握し理解するかという本共同研究の試みは、上述したように特定の地域や民族集団に限定せず、むしろ民族誌的な研究成果の比較と対話を試みるものであった。そのため事例とテーマは拡散することになったが、予想以上に、それまで別々に行ってきた研究同士の対話が可能であることも明らかになった。

研究成果と今後の成果報告

2年間の共同研究を通じて特に明らかになったことは、異なる移民を対象とした研究を相互に比較・参照するという共同研究の可能性である。一連の共同研究会を通じ、共通する問題意識や調査テーマを浮かび上がらせることが可能になっ



パプアニューギニアにある華人の墓地。現在ではパプアニューギニアからオーストラリアに再移住する華人が増加しているため、華人墓地が使用されることは少なくなってきている。



オーストラリアにおけるパプアニューギニア華人のキリスト教団体。パプアニューギニアでキリスト教を信仰するようになった華人は、再移住先でもキリスト教団体を形成し、同郷者同士で定期的集まっている。

た。例えば移民と故郷との関係や、移民による故郷認識といったテーマに関しては、異なる地域での調査方法や調査テーマを紹介し比較することにより、相互に参考になる部分が多かった。個別の居住地を越えて他地域や他の国家へと移動する人々が、移住先でどのような社会空間や景観を形成するのか、移住した人々が故郷との間にどのような感情的・社会的な関係を構築し、トランスナショナルな社会空間を形成するのかといった問題を、小規模な地域でのフィールドワークを身上とする人類学がいかにして把握することができるかを相互に議論することができたのはたいへん有益であった。

本共同研究は2年間という通常の民博の共同研究よりも短い期間の開催であったため、研究活動に制限があったことは否めない。だが上述のように、場所や空間、景観といった概念を共通テーマとすることにより、異なる移民研究の間に対話の場を設け、故郷概念や帰郷経験、墓地や家屋、村落内の景観の研究、異なる地域の事例の比較研究等、さらなる研究課題を見出すことができたのは、本共同研究の一番の成果であると思われる。

なお本共同研究の成果は、国内での成果報告に加え、国外での公表も試みている。2009年8月には、大韓民国デジョンで開催された第6回国際アジア研究者会議 (International Convention for Asia Scholars 6) でパネルセッション Religion and Social Space: Anthropological Studies in Asian Societies を組み、当共同研究メンバーの市川、小谷、椿原が、他の若手研究者 (松尾瑞穂、佐藤まり子、岡部真由美) と共に、共同研究の成果の中間報告を行った。また2011年3月にアメリカ合衆国ハワイ州で開催される第7回国際アジア研究者会議にも参加し、パネルセッション Space of Movement: Anthropological Studies of Social Space for Transnational Migrants in Asia and Beyond を開催する計画を立てている。市川の他、飯高、木村、久保、窪田、椿原が参加し、2年間の共同研究の成果を国際的な場で公表し成果を問うことを試みる。本共同研究の成果は、日本国内だけでなく、今後も積極的に海外でも公表することを目指す予定である。

いちかわてつ

立教大学AICC観光研究ユニット助教。専門は文化人類学、トランスナショナリズム研究。論文に「The Role of Religion in Chinese Subethnicity: Christian Communities of Papua New Guinean Chinese in Australia」(People and Culture in Oceania 24 2008)、「新たな移民母村の誕生：パプアニューギニア華人のトランスナショナルな社会空間」(『国立民族学博物館研究報告』33(4) 2009年)など。